

もくぞう あ み だ によらいりつぞう
木造阿弥陀如来立像

市指定有形文化財（彫刻）

赤湯地区の烏帽子山八幡宮には鎌倉時代に作られた「木造阿弥陀如来立像」があります。仏身のみの高さが33cmあり、縦に長い厨子（仏具）に納められ丁寧に保管されています。頭部の渦巻き状の宝髪は縄状に束ねられており、平安時代後期、中国から持ち込まれた京都嵯峨清涼寺本尊と似た清涼寺式の珍しい彫像です。眼は白毫（※1）とともに欠損していますが、玉眼が入っていれば、端麗なお顔であることがうかがえます。光背（※2）は拳身光と称される火焰型をして、透かし彫りが細かく施されています。静かで優しさに満ちた相好（表情）は人々の心をひきつけるものがあります。

木造阿弥陀如来立像は、もとは赤湯地区の清水町地区にあった真言宗当山派深山寺の本尊で、深山権現と称されました。深山寺を開山するにあたり僧侶が京都方面から求めたものと伝えられています。この深山寺があったことで、清水町地区は深山地区とも呼ばれていました。八幡神社の神職である新山家が深山寺の住職を33代務めました。明治3（1870）年に神仏分離令により廃寺となり、住職は神職となりました。現在、現地に深山寺の跡はありませんが、烏帽子山八幡宮に深山寺境内の建物配置図が残っているため、その様子を知ることができます。

烏帽子山八幡宮は、もとは赤湯地区の北町地区の八幡沢にあり、明治23（1890）年に社殿が湯の山（現在の烏帽子山）に遷されました。神苑（神社の境内・庭園）には桜が植えられ、毎年花見客で湯の山は黒山のようになったそうです。神社を中心とした湯の山の公園は、当時偕楽園と命名されましたが、後に烏帽子石があることから烏帽子山公園と改められました。



※1＝仏像の額にある小さなコブ。白い毛が右巻きに丸まっており、常に光を放つとされる。

※2＝仏像の背後につける装飾。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤庄一
平成30年8月1日号 市報なんよう掲載